

# ひと呼吸

#12 Horita Ryo

私たちの日常。それは多くの営みの連なりである。普段、それぞれの行為の意味を考えることは少ないが、ふと立ち止まって考えてみれば、そこには偶然と必然が潜んでいることに気づく。

呼吸。そのような自然な行為ですら、太古における偶然と必然の産物であつたといえるかもしれない。

この『ひと呼吸』が、手に取った人の日々の呼吸（營み）を見つめ直すきっかけとなり、そして、それぞれの日常のなかでの「ひと呼吸（休息と起點）」になれば嬉しい。

# #12 Horita Ryo

新鮮だった障害学生支援

宮谷 今日のインタビューのために堀田さん

が書かれた論文をあれこれ調べて来ました。最近『心理臨床の広場』に掲載された「サッカーハート」も読んできましたし、

今誰よりも堀田さんに詳しいと思います。

サッカーと堀田さんは切り離せないですよね。

堀田 そこまで読んで来てくださってありがとうございます。北海道出身で、物心ついた頃からサッカーに明け暮れていました。大学時代も入学式の翌日から卒業の年まで週り回

ペースで部活に通っていました。だから、専門はサッカーですとも言つてきました(笑)。

宮谷 心理臨床を志すようになつたのも自分がサッカーで挫折を経験され、そこからだつたとか。

それでカウンセラーとして岐阜大学に赴任されますが、僕が今日まで聞きたかったのは、なぜ障害学生支援に携わるようになったのかということです。

堀田 そうですね。僕も最初はカウンセラーとして、当然カウンセリングをするものだと思って赴任しました。きっかけは、僕の1年後に岐阜大学の障害学生支援室に着任さ

れた、「ひと呼吸」の編集メンバーでもある船越高樹先生ですよ。同じ学生と一緒にみる機会が増え、それこそ一緒に面接に入るこ

ともありました。

宮谷 どういう形で入るんですか。

堀田 主に引き継ぎをする時なんですねけれど、僕がみている学生を船越先生に紹介するとき

やるかと言ふとそうではないですよ。そこは役割分担や連携が大事という話です。

条件的なことを言うと、岐阜大学は常勤カウンセラーが僕一人で、あとは勤務日数の限られた非常勤カウンセラーだけです。他部署との連携も、毎日勤務しているからこそできる

ことで、少ない勤務日数でカウンセリングをやりながら他部署とも連携してっていうのは正直難しいと思います。だから、そこも役割分担です。

宮谷 そうか。前にお話を伺った時も、障害学生支援をどっぷりやるわけじゃないみたい

なことを言わっていて、寂しいこと言うあなたよつと思つたんですけど、それは役割

分担という意味でもあつたわけですね。

堀田 そう。あとは身体障害に関する自分の知識のなさもちゃんと認めないといけないと思つてゐるところがあります。

その人にどんな障害があろうと、自分が関われるところはあると思つてますけれど、法律や利用できる福祉サービスといった知識が自分には圧倒的に足りない。だからそこは、障害学生支援の専門家にコーディネートしてほしいと思つてゐるんです。

宮谷 なるほど。そういう好み分けがあるんですね。

堀田 そう思うようになつたきっかけが、以前田亮・ほりたりょう

東海国立大学機構 岐阜大学保健管理センター 助教 (臨床心理士・大學生カウンセラー・公認心理師)



Interviewer Miyatani Masashi / Text Kitani Megumi

に、僕も一緒に面接に入るし、その逆もあつたという感じです。

宮谷 なるほど。引き継ぎまではわかりますけれど、面談に一緒に入るというのはちょっと想像しにくいですが、それはどちらから提案したんですか?

堀田 どつちだつたかな。たぶん自然とそ

なったんです。例えば僕がみている学生に障害学生支援室を紹介する時、行つておいでつて言うだけじゃなくて、一緒に行つた方が学生も安心するだろうと思って一緒について行く。そんな感じです。

宮谷 一緒に面談に入ると、やり方の違いとかいろいろあると思うんですけど、その辺はどうでしたか。

堀田 そうですね。動的っていうか、積極的に関わっていく。それが新鮮でした。

カウンセラーってどちらかというと「待ち」の姿勢なので、相手からどう話を引き出すかをかなり重視するんです。けれどもそうじやなくて、こちらから提案していく。その違いは大きかつたし、少なくともその学生にとつては有効な面があるなと思いました。だから一緒にやっていく必要があると思ったんです。

宮谷 それに気が付いたとしても、すぐに実践できるかというとなつか難いんじゃないかと思います。

堀田 良いと思えたら一緒にやろうって、あまり抵抗なく思ふんですね。チーム競技のサッカーをやつていたからかもしれないですね。

宮谷 なるほど。

堀田 もちろん、障害学生支援と同じように



## 役割分担と連携

けれど、良いことはみんなでやろうみたいな。そういうのが好きなんでしょうね。

宮谷 ただどうしたアカデミアの世界つて、誤解を恐れずに言うと、自分の流派や領域を大事にする側面もあるんじゃないですか。障害学生支援という比較的新しい分野との連携に抵抗はなかつたんですか?

堀田 そこは僕のコンプレックスでもあります。強みでもあるかもしれないんですが、例えば認知行動療法や精神分析といった領域設定をせずにやつてきたところがあります。だから軸がないとも言えるけれど、絶対触れられたくない場所みたいなのもあまりなくて。だからできてしまうのかもしれないですね。

宮谷 なるほど。

堀田 もちろん、障害学生支援と同じように

## やつてることの意義をどう示すか

前、助成を受けて行つたアメリカ研修<sup>1</sup>でした。アメリカの障害学生支援室には、法律や制度に関する情報が集まつていて、部署としてもしつかり確立しているんですね。

宮谷 専門分野として発達している。

堀田 そう。良い意味で権力があつて、発言力がある。

宮谷 さらにそのとき思ったのが、障害学生支援にはいろいろなプログラムを展開していく可能性があるということです。カウンセリングでも、個別支援やグループ・プログラムをやつたりしますけれど、もつと様々なプログラムが動いていく可能性があるなと思いました。

宮谷 確かにそう言われるとそうですね。僕が所属する京都大学でも、社会移行や高大接続・災害対策、アシステンティブ・テクノロジーやアセスメントといったプロジェクトをやつています。

堀田 それで僕もアメリカから帰ってきた翌年に、船越先生と川上ひろ先生<sup>2</sup>と新しいことをやろうと言つて、2017年から岐阜県内のいろんな機関を巻き込んでシンポジウムを開催することにしたんです。「地域と大学」だつたり「専門職養成における支援」というテーマで、就労支援機関や教育委員会、あと地元の企業の方にも登壇してもらいました。

宮谷 所属も専門も異なる三人が連携してやつてきたわけですね。

堀田 そうですね。三人とも自分たちがやりたくて、かつ必要のあること、そして新しいことをやろうという気持ちがありました。

実際、シンポジウムにはいろいろな人が来てくれました。その時思つたのが、こうして実際に足を運んで、様々な領域の人々が顔を合わせてお互いの課題を知ることができるのは、岐阜だからかもしれないなと。大都市圏だから

たら規模的に難しいだろうと思いました。

<sup>1</sup> 援は引き算がモットー。本当はサッカー選手になりたかった。

<sup>2</sup> 道産子。大学院博士課程修了後、2014年より現職。カウンセラーが本職だが、気がつけば障害学生支援の魅力と可能性に惹かれ、今はハイブリッドな支援者を目指して奮闘中。

精神・発達障害学生の心理、修学、就職支援を中心に、持ち前のバイタリティとチームプレーの精神で学内外の連携体制構築やイベントの企画にも精力的に取り組んでいる。支援は引き算がモットー。本当は

際に使われていて、英語版は62項目、日本語版は僕らが日本の状況に応じて55項目8領域に設定し直しました。

新入生の健康診断の時なんかにするメンタルスクリーニングテストのようなもので、ひとつか社会不安、食行動なんかについて質問します。

宮谷 回答で気になる学生がいたら呼び出して話を聞いたりするんですね。

堀田 そうですね。従来のものだと回答結果が出るまでにかなり時間がかかるてしまい、呼び出しても学生が覚えていなかつたり、あと、呼び出しかからないり割の学生にどうしては意味のないものでした。CCAPSだと回答結果が一瞬にしてグラフ化されるので、本人もその場で確認できるようになりました。

宮谷 わかりやすいですね。

堀田 学生にとつていかに意味のあることをできるかっていうのを考えていきました。

例えば日々の面接でも、この面接にどんな意味があるのか、学生自身がわからないときもあると思うんです。

けれどやつぱりわからないまま、いるよりも、その時々の状態を一緒に確認しながら進められる方がいいですよね。そういう時にこのCCAPSは有効で、実際に使っています。

それに僕らは、自分たちの仕事の説明責任が求められる時があるので、それを客観的に示す上でも意味があります。

宮谷 確かに成果というのは、対人援助職では得られにくいですよね。

堀田 障害学生支援でもそうだと思いませんが、今月は何件対応したとか、そういう数値を出すわけですよね。



宮谷 窓口に来た学生数とか。

堀田 その数字も一つの指標になるので否定はないですが、もうちょっと意味のある数値というか、効果を示す必要もあると思います。

宮谷 なるほど。僕もそれは課題だと思ってはいて、学生自身も客観的な評価を得られてはいけないのは、自分たちのやっていることの意義をえてわかりやすく伝えるために使っているんだという自覚を持つことです。もちろん学生にとつて、本当に意味のあることをやっていることが前提ですが。あくまでもこうした指標は意識的に使うことが大切で、そうでないと、数値だけで学生をみるとことになります。

堀田 ただこうした数値を使う時に忘れてはいるんですけど、以前別の企画でお会いしたときに「同感と共感は違う」と言われていました。それを聞いて僕すごく反省したんです。

今年で30歳になるんですが、まだなんとなく学生の延長、少し年の離れた先輩ぐらいの気持ちでいたところがあつて。でも少し年上の

堀田さんからその言葉を聞いた時、学生と関わる際にはプロとして、対人援助職として、そのままの自分みたいなものから脱皮しないといけないって気付かされたんです。

学生の話に「僕もあなたと同じ気持ちだよ」と同感するのではなくて、「歩ひいて「あなたはそう思つたんだね」と共感できるかが大事なんだ。

堀田 ああ、そういうこと言いましたね。

宮谷 そう。でも、障害学生支援のコーディネーターって、学生の話を聞くプロであることによりも一人の人として、素人っぽさとまで言わないで、今後どうやって学生と関わっていくかちょっと悩んでいます。

堀田 そこにはもしかすると、障害学生支援と学生相談の違いもあるかもしれませんね。

宮谷 と学生の世界を理解しようとしているという意味で言つたんだと思います。

堀田 確かに学生と一緒に権利を主張していくので、学生に同感する部分が大きくなりがちです。

その失敗させないための支援とはどういうものですか。

堀田 これは僕が精神障害や発達障害の学生と関わることが多いからだと思いますけれど、「合理的配慮を提供したらできる」といったときに、すぐにその合理的配慮をするといった支援です。正直、合理的配慮も危ないなと思うところがあります。

例えば体調が悪い、精神的に落ち込んでいる、だからといってすぐにレポートの提出期限を延ばす合理的配慮をすることが本当にその学生のためになつていいかというと、僕はあんまりなつていいんじゃないかと思うんですね。

宮谷 難しいですね。今多いのは、オンラインだと出席できていたので、授業をオンラインで受けさせてくださいという要望です。す

ごく悩ましいなと思います。

堀田 先回りして最初の段階で合理的配慮を提供してしまうと、仮にそれで問題がなくなつたとしても、それでいいのかなと思うんです。

宮谷 確かに成果というのは、対人援助職では得られにくいですよね。

それにも僕らは、自分たちの仕事の説明責任が求められる時があるので、それを客観的に示す上でも意味があります。

宮谷 確かに成果といふのは、対人援助職では得られにくいですよね。

宮谷 確かに成績といふのは、対人援助職では得られにくいですよね。

堀田 障害学生支援でもそうだと思いませんが、今月は何件対応したとか、そういう数値を出すわけですよね。

宮谷 確かに成績といふのは、対人援助職では得られにくいですよね。



4 CCAPS (Counseling Center Assessment of Psychological Symptoms) 大学生のための心理・精神状況評価尺度

岐阜大学医学教育開発研究センター併任講師

発達障害児への性教育、医療

援助とキャリア支援に関する研修

を受けた。

岐阜大学医学教育開発研究センター併任講師

専門職養成学部における支援な

どのテーマで毎年開催され、2

010年度・2011年度はオ

ンラインで開催された。

岐阜大学医学教育開発研究セン

ト専門職養成学部における支援な

どのテーマで毎年開催され、2

010年度・2011年度はオ

ンラインで開催された。

岐阜大学医学教育開発研究セン

## Editor's Note

取材にお伺いしたのは、冬の訪れを感じる12月上旬。ここ数年、堀田さんは年1回ぐらいのペースでお会いしています。いずれも違う媒体や企画で面白そうなことをされている人の話を聞きに行く、見に行くというものです。

今回初めて私が聞き手という立場で関わられたので、堀田さんの博論や記事を読み漁り、私が気になっていたことや聞きたいことを直球で質問できました。答えにくい質問もあったかと思いますが、颯爽とそして誠実に返してくださいました。私のなかのカウンセラーという存在をアップデートしてくれます。

印象的だったのは「岐阜だからできることがある」ということば。地域によって国立大学の立ち位置は若干異なるのだと思いますが、岐阜県における岐阜大学は非常に大きな存在。地域連携のキーパーソンである堀田さんとお話ししているとスマートさだけではなく、その気概、何より飾らないお人柄がひしひしと伝わってきます。

取材後の車中で「かっこいいな～」「ほんとかっこよかったですよね～」としきりにつぶやく私、ちょっと気持ち悪いでしょうか。

最後、残念ながらカットした堀田さんのひと呼吸は私も未知の世界でした。勉強しておきます。

(宮谷祐史)

## Concept

障害のある学生が高等教育にアクセスする権利を保障するための取り組みである「障害学生支援」には、その主人公である学生と対話し、ともに行動してきた多くの実践者たちの存在があります。こうした実践者一人ひとりには独自のバックグラウンドがあり、またそれぞれの考え方や想いをもって形作ってきた歴史があります。

私たちは、これらの「人」によって蓄積されてきた考え方やその想いを知ることが、これから障害学生支援を考えていく上で貴重な機会となり、この分野の魅力を知ることにつながると考え、この『ひと呼吸』を発行することにしました。ここに綴られているのは、私たちを含めた一人ひとりの関係者にむけた応援のメッセージです。

ひと呼吸・編集委員会

村田淳（京都大学）

船越高樹（国立高専機構本部）

宮谷祐史（京都大学）

木谷恵（フリーランス）

発行／高等教育アクセシビリティプラットフォーム（HEAP）

Address 京都市左京区吉田本町

京都大学学生総合支援センター内

Web <https://www.gssc.kyoto-u.ac.jp/platform/>

Mail heap@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp

Tel 075-753-5707